づく経済理論では現実は説明できないとして，人々はそれぞれに力の欲望をもっていて，それにもとづく行動のなかから社会的勢力という現象が生まれるとして，社会的視野をもった経済学を構想されました。高田先生は京都大学で柴田敬，青山秀夫といった理論家を育てられ昭和19年に京都大学を退官されました。その後，民族研究所の所長をされました。終戦後には当時の経済学部の教授全員が辞表を提出するというようなことがありましたが，先生も教職適格審査によって一時教職を離れざるをえないという事態が生じました。その後，文部大臣によって原審破棄の裁定を受けて教職に復帰され，大阪大学の経済学部の確立，また同大学の社会経済研究所の創設に奮闘されました。1965年には文化功労者としての栄誉を受けられ，1972年の２月になくなられました。

本日は高田先生のご三女の高田千津子さまもおいでいただいていて，わたしたちにとって大いにはげみになっています。また，高田先生をご存知の方は少なくなっているわけですが，本日は京都大学名誉教授の市村眞一先生にもご来席いただいております。市村先生は，東南アジア研究センターで長くご研究されたあと，大阪国際大学の副学長や，北九州市の国際東アジア研究所の所長をされ，いまも北九州市でお仕事をされています。まず市村先生に，高田先生の人となりをご紹介たまわりたいと思います。

高田保馬先生の人となり

市村眞一

高田保馬先生のことを直接存じ上げている方はもうほとんどおられなくなり，私が生き残っている最後の一人になりそうですので，簡単にお話させていただきます。

高田保馬先生はただいまのお話にありましたように，私には３つの側面をもった偉大な学者であったと思われます。第１は社会学者で，第２は経済学者，そして第３は詩人としてであります。そのいずれの面におきましても，第１級の業績を残されました。社会学の面におきましては，『社会学原理』という非

常に分厚い本がありまして，それまでの社会学説をほとんど集大成しておられるのです。その仕事は，先生の恩師である米田庄太郎先生という方がまた非常に学説史に明るい方で，ヨーロッパへの滞在も長く，『晩近ドイツ・フランス社会学説の研究』『晩近イタリア社会学説の研究』ということで，英独仏のみならずイタリアまでふくめて，ヨーロッパの社会学説を詳しく書かれていますが，それを土台として，さらにその後の研究をふまえたものが『社会学原理』でありまして，今日では，高田社会学というのは西洋の社会学説をのりこえようとした日本人としてはじめての試みとして評価されています。最近高田社会学に対する関心がとみにリバイバルしまして，東京大学の富永健一教授およびそのお弟子さんがたが『高田保馬リカバリー』という論集を出され，また先生の旧著も3冊リプリントされて世間に利用されるようになりました**。

経済学の分野におきましては，『経済学新講』というさきほど述べられた5冊の著作がありまして，これも社会学における『社会学原理』にちょうどあたるような，経済学説の集大成でございます。1930年代までの経済学をあんなにみごとにまとめたものは世界にもほかにないと思っています。そこまでのことを一挙に知ろうと思えば，あの5冊を読めばいいのであります。そのエッセンスをすくったものが『経済学原理』という本で，当時高等文官試験に成績良く合格しようと思えば，その書物を7回か8回読まなければいけないと言われていた名著であります。

私も学生時代に先輩からそのように言われ一生懸命に読みました。それで6回目7回目あたりからようやくわかりはじめました。アメリカに留学してサムエルソン教授にはじめておめにかかりましたときに，サムエルソン教授が私に発した最初の質問が，「あなたは経済学でどんな本を読んだか」というものでした。私は「高田保馬という人の Principles of Economics というのを10回くらい読みました」といいました。「10回も読まなければいけないのか」という

** 金子勇編『高田保馬リカバリー』ミネルヴァ書房，2003年，および金子勇氏の監修になる復刊3冊，『勢力論』（『高田保馬社会学セレクション1』）『階級及第三史観』（『高田保馬社会学セレクション2』）『社会学概論』（『高田保馬社会学セレクション3』）いずれも2003年刊行。

高田保馬教授退官記念肖像画

ので「6，7回目になってようやくわかりはじめたと思います」というと，「それではお前はヒックスのValue and Capital を読んだそうだが，何回読んだか」というので私は「3回読みました」といいました。「自分の Foundation of Economic Analysis は」というので「1回読みました」というと，「たった1回だけか」と言われました。去年，博士号をとってから50周年の同窓会があって行きましたところ，サムエルソンさんとソローさんがわれわれ夫婦をもてなしてくれました。そのときにサムエルソンさんがその話をもう一遍しまして，ソローさんに「お前は知っているか，ぼくの本はたった1回だぞ」と言われました。すると，ソローさんが「いやそれはお世辞である。良く書けていたので1回でわかったのだ」と言ってくれたことがございます。ことほどさように高田先生の本は難解でしたが，チャレンジするに値する本でした。

高田先生はそのほかにも経済学の論集を沢山出されていますが，ここでは申し上げません。その立派なご業績は，さきほど紹介された根岸さんの学説史に詳しく書かれていますので，それをみられたらよろしいかと思います。

高田先生の社会学の仕事にも，知られざる最後の書物があります。それは岩波書店から『社会学概論』が戦後に出ていますが，先生にはそれを英語版で出したいというお気持ちがございました。先生が大阪大学の教授でおられた時，私は助教授でしたが，先生は，私に，「市村さん，私は社会学の仕事を世界に知ってもらうために，この本を英語にしたいのだ」と何度も言われました。私はその当時忙しくしていたもので，「ああそうですか，そうなるといいですね」

なんて言っていただけでした。先生がなくなられましてから，先生の遺品が，大阪大学の社会経済研究所に寄贈されましたが，そのなかにぎっしりとみみずのはったような文字でしたが，大学ノートに何冊も自ら翻訳されていました。それは岩波から出た『社会学概論』の英訳でした。最後の１章を除いては全部訳されていた。私はそれをみて，ああこれかと思い，正直いいましてぼくの方が英語は少しましでしたから，生きておられた間に何とかしてあげればよかったと，しみじみ思ったわけであります。

それで一生懸命文部省の補助金もいただいたり，ご遺族の方のご寄付もいただいたりしてできあがったのが，この東京大学出版会からでた Principles of Sociologyです。この本の社会学の内容は，岩波の日本語のものよりもっと新しいバージョンのもので，先生が社会学で何をいいたいかということのエッセンスが含まれています。私もこの翻訳を一生懸命やることでようやく高田社会学の本質がわかりました。これは今は絶版ですが，図書館にはあるでしょうから，みなさんには，ぜひごらんいただきたいとおもいます。

最後に，高田先生は実にすぐれた歌人でいらっしゃいました。与謝野晶子さんとほとんど同輩であられて，ファーストネームで与謝野晶子さんを呼んでおられました。それほど若い頃からお親しかったのでしょう。今日ここにもってきましたのは，翻訳を仕上げたときに高田家から御礼にということでいただいた一幅であります。

日ざかりの川古の里の大楠の蔭にし母とまたいこはめや

宮中の新年の歌会始めに，1964年に召人としてまねかれておられます。経済学者として，社会学者として，また歌人として，京都大学が誇るべき偉大な人物をもったことは幸せであります。学問に従事するものとして大きな目標だと思います。